

## ファーストフードの摂取状況についての実態調査 (分担研究：子どもの食生活の変化と その健康におよぼす影響)

金子堅一郎、箕輪富公

要約：最近の食生活は、ファーストフードの普及・多様化により大きく変化している。子ども達の間ではファーストフードとして何が、どの位摂取されているかの実態を知り、それが身体面および精神・心理面に与える影響を検討する目的で、アンケート方式による実態調査を計画した。アンケートは都市部(約1800人)、地方部(約1500人)、農村部(約300人)の3地域の学童について1993年4~6月にかけて行われる。同時に、体格測定や学校検診の結果との関連を調べる予定である。

見出し語：ファーストフード、アンケート調査、学童

〔研究目的〕：生活環境の変化、特に食生活の変化は子どもの健康にとって少なからぬ影響を及ぼすことが考えられる。しかし、従来は一般的な通念や大まかな調査による推測での考えがほとんどで、詳細な実態をふまえた検討はなされていないと思われる。一方最近の食生活は、ファーストフードの普及・多様化により大きく変化し、子どもが摂取する機会も多いと考えられる。

そこで、現在、子ども達のファーストフード摂取状況において、次に挙げることを知る目的で実態調査を計画した。1) 実際には、何が、どの程度摂取されているか。また、都市・地方市・農村部など地域による違いがあるか。2) 摂取状況と生活

環境(学習や遊び)や家族環境との関連。3) 摂取状況と身体面(体格、疾患)や精神・心理面での問題との関連。

これらの調査によりファーストフードの利用を中心とした食生活の変化と子どもの健康との関係を明らかにしたい。

〔研究方法〕：調査対象は、自分でファーストフードなどを自由に摂取できる小・中学校の学童とし、1) 学童およびその家族へのアンケート調査の実施、2) 同アンケート対象学童の学校における体格測定の結果(一部では検診の結果)を組み入れることとした。

このため、本年度は、アンケート調査用紙を作

順天堂大学浦安病院小児科

(Dept. of Pediatrics, Juntendo Univ. Urayasu Hospital)

成した。主な項目は、ファーストフード・清涼飲料水の具体的な摂取状況、家族構成、通常の食事状況、現在の健康状態、学習や遊びなど日常生活の現状とした。このアンケート調査には学校での体格測定（肥満度）結果を記入し、一部では併行して行われている他の検診結果との対応ができるようにした。

また、本年度は頻回の交渉によりアンケート調査のフィールドを確立した。実施地域は次の3地域とした。1) 千葉県浦安市……都市部。市内の小学校4年、中学1年の学童（約1,800人）\*中学1年は希望者全員に貧血および成人病危険因子関連の血液検査施行。2) 茨城県鹿島郡鹿島町……地方部（臨海工業発展地）。町立の小学校4年・中学1年の学童（約1,500人）\*同町では学童を対象に成人病危険因子関連の血液検査が従来より行われている。3) 茨城県稲敷郡桜川町……地方農村部。村立の小・中学校学童（約300人）。以上の3地域の対象学童に平成5年度第1学期中にアンケート調査が実施される。

〔調査地区で行われていた関連アンケート調査〕：本研究外ではあるが、今回の調査地域である鹿島町と浦安市の学童を対象として、目的は違うが日常生活のアンケート調査が行われており、今回の調査の参考資料になったので表Iにまとめを示す。

1984年の鹿島町の調査では、肥満群の学童は非肥満群に比し夜食を多くとる傾向があり、高度肥満には高コレステロール血症の頻度が高くなっていた。この調査では、鹿島町が急速に都市化した反面、肥満児に対する認識・対応の不足と考察している<sup>9)</sup>。現在、さらに同町に押し寄せていると思わ

れる子どもの生活環境の変化、とりわけ夜食としてすぐ利用できるファーストフード摂取と肥満との関連など興味深く、今回の調査結果が待たれる。1992年7月の浦安市の調査は、子どもの体格などとの対応がまだなされていないが、夜食としてファーストフードに該当するものの摂取が以外に少ない印象であったが、調査目的が異なっているため質問内容が問題かも知れない。

〔本研究による成果〕：本研究により得られた結果から検討されるべき点として次が挙げられる。1) ファーストフードの不適切摂取により肥満あるいはやせ、小児成人病危険因子および慢性疾患など身体的異常がおこりうるか。2) ファーストフードを不適切に摂取せざるを得ない子どもに精神・心理面的問題がおこりうるか。3) ファーストフードは、現在の子どもの生活環境・家族環境にとっては必要不可欠なものか。

以上のような点を検討することにより現在の子どもの健康保持のために、ファーストフードなど食生活の変化に対し適切に対応する方向性を見出すことも最終成果としたい。

#### 文献

- 1) 箕輪富公ら：茨城県鹿島町の児童生徒の肥満およびやせ傾向の実態調査成績：小児保健研究，45，333-338，1986。

表 I : 同地区で行なわれていた関連調査 (本研究外)

1. 1984年度高町立小学校・中学校学童 6,864名  
アンケート調査結果

1) +20%以上肥満	7.5% (→1980年 9.9%)
+40%以上高度肥満	1.5% (→1980年 1.8%)
-20%以下やせ	0.6%

2) 肥満群 : 非肥満群に比し

朝食をとらない傾向あり
夜食を多くとる
(肥満群 32.2%、非肥満群 19.8%)
間食は差がない

2. 1992年7月浦安市内小学校4年 735名、中学1年 771名  
アンケート調査結果

	小学校4年	中学1年
1) 朝食はいつも食べる	90.7%	75.0%
(清涼飲料水類)	8.6%	10.6%
2) 夜食をいつも食べる	66.7%	35.3%
(ハンバーガー)	1.2%	2.1%
(スナック菓子)	58.3%	39.0%
(ジュース類)	29.7%	49.4%
3) 食生活に気をつけている	39.6%	49.4%
(インスタント食品を食べない)	7.4%	12.2%

Abstract

The investigation of the intake of fast food among children in an actual situation

Ken-ichiro Kaneko and Yoshimasa Minowa

We planned this investigation with a view to finding out what kinds of and how much fast food are eaten among children, and examining how they act on one's health physically, mentally and psychologically.

We will make a survey from April to June in 1993 through questionnaires sent to approximately 1800 children in an urban district, 1500 in a country and 300 in a rural district.



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:最近の食生活は、ファーストフードの普及・多様化により大きく変化している。子ども達の間ではファーストフードとして何が、どの位摂取されているかの実態を知り、それが身体面および精神・心理面に与える影響を検討する目的で、アンケート方式による実態調査を計画した。アンケートは都市部(約 1800 人)、地方部(約 1500 人)、農村部(約 300 人)の 3 地域の学童について 1993 年 4~6 月にかけて行われる。同時に、体格測定や学校検診の結果との関連を調べる予定である。